

## “自己と他者の心の理解”に関する臨床心理学的研究

—精神発達遅滞児と自閉性障害児の喜びと悲しみの

感情理解に視点を当てて—

鹿児島純心女子大学大学院（非常勤講師）

小 田 奈緒美

### 和文要旨

「表情認知課題」と、「喜びと悲しみの感情理解に関する課題（自己と他者）」を精神発達遅滞児群と自閉性障害児群に実施したところ、特に、自閉性障害児群では「表情認知課題」に誤答したにもかかわらず「喜びと悲しみの感情理解に関する課題（自己と他者）」に正答していたことが見出された。これは「写真」や「イラスト」といったストーリーのない切り取った一枚の「表情」のみでなく、ストーリーの主人公（他者）や自己の感情について、ストーリーの文脈に感情移入しつつ理解することができているのではないかと推測された。つまり、このことは、感情理解の発達を促進する手がかりになるのではないだろうか、ということが考察された。

キーワード：精神発達遅滞 自閉性障害 喜びと悲しみの感情理解

### I. はじめに

自己と他者の心の理解に関して、1999年、精神発達遅滞児と自閉性障害児を対象に、「表情認知課題」と、「喜びと悲しみの感情理解に関する課題（自己と他者）」について実験を行った。

その結果、「表情認知課題」に誤答しても、「喜びと悲しみの感情理解に関する課題（自己と他者）」に正答する者がいた。

今回、その時の研究協力者の実験データを元に、感情理解のありようを分析してみた。

### II. 問題

#### 1. 自己と他者の心の理解の発達

Hobson(1989)の感情理論では、自閉性障害の基本的障害を、他者と情緒的に関わる能力の先天的障害にあるとし、その基本的障害のために、他者の心理状態を認知できず、遊びやことばの使用に問題が生じてくる、と説明している。

Hobson(1989)の理論では、われわれは生まれたときから、生物学的な基礎のある、他人の情動を知覚する能力を持っている。これが自閉性障害児には欠けているのであり、したがって非常に早期

から困難が始まる。彼らが乳児の時は、他人の身体表現の背後にある感情が分からないし、保育者との情動的な伝達、すなわち心理的なつながりも経験しない。ここから子供の心の発見は始まるのに、自閉性障害児はこの出発点をもたない。彼らにはこの基礎がないので、他人や自分の心的生活についての洞察をもたないのだ、とHobsonは言う。

Hobsonは、自閉性障害児は他者の心を理解する能力を損傷しているという非常に単純な仮説を立て、子どもの他者との情動的な結びつきが損傷することにより、自閉性障害へといたるという証拠を吟味している。

#### 2. 「表情認知」に関する研究について

表情刺激による研究では、喜び、悲しみ、怒りなどの基本的情動は3・4歳頃から理解できるとされ、星野(1969)は3～22歳を対象として表情認知の発達を研究し、ほとんどの3歳児が喜び、悲しみ、怒り、楽しみ、不満、中性の表情を弁別できることを示している。また、Soraceら(1985)によるVisual Cliffの実験は、1歳児が母親の表情を認知して、行動を決定できることを示してい

る。他者の感情を識別することが乳児期早期から可能であることをHaviland & Lelwicka (1987) は生後10週の乳児が母親の怒り、悲しみ、喜びの表情に対して特異的な反応を示したことから明らかにしている。その後、言語刺激による研究では、櫻庭ら (2001) は2~4歳を対象として情動語の理解力と表情認知能力を比較し、情動語の理解力がどの年齢でも表情認知能力を上回ること、喜び、悲しみの理解は、驚きや怒りよりも成績が良いことを示している。

これまで、自閉性障害児の表情認知の課題を行った研究があるが、若松 (1989) によると、M.A. の高い自閉性障害児であれば、表情の認知の正答率において、3歳違う精神発達遅滞児とした場合、差がみられないことが報告されている。

その後の研究では、自閉性障害児・者の表情認知に関する実験的研究の中には、精神発達遅滞群などと異なり、自閉性障害群は顔面表情を全体としてではなく、部分的に処理している可能性が示唆されるとの報告が散見される (若松, 2002)。

### 3. 「喜びと悲しみの感情理解に関する課題 (自己と他者)」に関する研究について

物語の主人公への共感においてBurns & Cavey (1957) は、3歳から6歳の子供たちに、短い物語とその場面を描写した刺激図版を提示し、その主人公の気持ちについて言葉で述べるよう求めた。その結果、3歳から5歳までの年少児の共感的反応は、5歳以上の年長児のそれよりも有意に少ないことが見出された。我が国においても、今井・桶本(1973)が、Borke (1971)と類似の手続きで4、5歳児を対象として、共感の発達を調べている。それによると、すでに4歳児でも共感性はみられるが、5歳児では4歳児よりも有意に高い共感性が認められた。Borke (1971)は、3歳から8歳までの子どもに一連の物語を聞かせた後、その場面を示す絵を主人公の顔を空白にして示し、主人公の気持ちを最もよく表している表情図を選択させ

た。物語の内容は、喜び、悲しみ、恐れ、怒りという4つの基本的な情緒場面を叙述したものであった。その結果、3歳程度の年少児でも、彼らなりに他人の感情を理解し、それに反応する能力があると主張している。

Chandler & Greenspan (1972) は、さらに、6~12歳までの子どもの共感能力について検討し、真に他者の観点に立って正確にものを見ることが出来る能力は、児童期中期にならないと完成しないとしている。廣田ら (1994) による、自閉性障害の感情予測の実験において、全体的に他者の感情予測の場合の方が、自己の場合よりも正答数が多いという結果になった。対象児は、他者の場合と自己の場合を区別して考えており、主に他者に対しては一般論ともいべき判断をしていることが認められた。一方、自己に対しては、自己に関して事実に即さない事柄に関しては仮定ができないという結果が見出された。

### III. 研究目的 (仮説)

本研究では、「表情認知課題」に誤答した者が、「喜びと悲しみの感情理解に関する課題 (自己と他者)」に正答している理由について分析していく。感情理解が難しいといわれつつも (Hobson 1989)、それが可能な事例について、その理由が明らかになることで、感情理解の発達を促進するヒントを得ることができるのではないかと思われる。

また、精神発達遅滞群では、「表情認知課題」に正答しても、「喜びと悲しみの感情理解に関する課題 (自己と他者)」に誤答している事例が見られた。この意味についても考察していく。

### IV. 方法

#### 1. 被験者

被験者は、それぞれV, W, X, Yの特別支援学校に在籍する児童・生徒、及びE学園の園生、職員である。被験者の人数は、自閉性障害児21名、精神発達遅滞児18名であった。生活年齢 (以下、C.A.) は、自閉性障害児 (6:2~26:7、平均

16歳8ヶ月) 精神発達遅滞児 (12:1~17:10, 平均12歳9ヶ月) である。自閉性障害児, 精神発達遅滞児の精神年齢 (以下, M.A.) は, 課題に対する意味理解, 簡単な受け答えができる被験者を対象とした。M.A. は, 辰巳ビネー式知能検査より算出した (精神発達遅滞児 M.A. 5:4~8:9, 平均: 6:8・自閉性障害児 3:6~10:10, 平均: 7:1, うち2名の M.A. は不明)。自閉性障害児と精神発達遅滞児の状態像については, DSM-IV (APA, 1995) の診断基準に準拠した, 治療心理学研究室作成 (久留・餅原, 1990) の PDiCC-A.D. (Psychological Diagnosis for Clinical Caring on Autistic Disorder) を用いて保護者との面接を行い, 発達的狀態像から, 臨床診断の再確認をした。

## 2. 実験の手続き

### (1) 実験内容

写真とイラストによる「表情認知課題」と、「喜びと悲しみの感情理解に関する課題 (自己と他者)」の2つの課題を実施した。

#### ① 表情認知課題

喜び, 悲しみの表情写真・イラストを, 「喜んでいる顔」「悲しんでいる顔」はどれかという実験者の問いに対して選択してもらう。

#### ② 喜びと悲しみの感情理解に関する課題 (自己と他者)

喜び, 悲しみの感情を想起する紙芝居3枚を簡単な物語とともに呈示し, 最後の空白になっている顔に当てはまる感情を表情カードで選択してもらう。ただし, 言語表現が可能であれば, その選択した理由も問う。また, そのような状況下で被験者自身であればどのような表情をするかを選択してもらい, その理由も尋ねた。

### (2) 実験道具

#### ① 表情認知課題

表情刺激は, 喜び, 悲しみの感情を表出した写真およびイラスト各3枚ずつである。表情写真 (カラー) のモデルは, 1名の表情表出の豊かな演

劇部の大学生のもので, イラストは筆者の自作であるが, 若松 (1989), 渡邊ら (1997) を参考に作成し, 全ての被験者に同一刺激で行った。なお, 喜び, 悲しみの2種の表情刺激の評定は, 臨床心理士2名, 大学院生6名で行った。

表情写真は顔面部の大きさが約7×7cmで, 肩から上が写されており, 9×11cmの透明シートに1枚ずつ入れて使用した。イラストは, マニラボール紙に黒のマジックで描かれた9×12cmのものを使用した。各感情カードの呈示に際しては, 1つの質問毎に規則的にカードの順番を移動させ, 位置によるカード選択の偏りがでないよう, 配慮した。

#### ③ 喜びと悲しみの感情理解に関する課題 (自己と他者)

喜びと悲しみの感情を想起させる各物語の主人公の行動状況を3枚の図版 (B5版大) にイラストを描いて着色したもの計6枚を作成した。3枚の各図版は, 物語の各段階の主事象と対応するように描かれた。途中の表情が結末の感情を表さないように配慮するとともに, 結末部の主人公 (他者) の表情は空欄にした。各物語の主人公で描かれた2表情の図版と同じように着色した選択カード (計6枚) も使用した。物語は, なるべくその状況が子どもに伝わるようにゆっくりで分かりやすい表現にし, 場面毎に理解されているか確認しながら読むようにした。また, 話す内容に合わせて, 伝えている絵の部分の指さすようにした。

### (3) 実験場所

実験は, V及びY養護学校, 自宅, Z大学相談室など, 被験者及び家族の都合のいい場所で行った。実験道具は机の上に置き, 実験者と被験者が椅子に座って向かい合う形で10分ほど行った。被験者の回答は, 目の前で記録用紙に記入した。

### (4) 評価に当たって

実験者が被験者に実験内容を説明するが, 被験者が内容を把握しにくいと感じた場合には, 2回まで説明を行うこととした。被験者の中には, 言

語表現が難しい者がいることも考慮し、身振りや指さしでの回答もよいこととした。自己に関する質問では、子どもが、よりその状況下での自己の感情を想起しやすい方法で答えられるように配慮した。

### V. 結果と考察

1. 「表情認知課題」の正答率については、精神発達遅滞群は表1に、自閉性障害群は表2に示した。「表情認知課題」の正答率をみると、写真、イラストによる喜びと悲しみの表情認知において、精神発達遅滞群は、全員正答していた。自閉性障害群は、写真の「喜び」が99.5%、写真の「悲しみ」が81.0%、イラストの「喜び」が90.5%、イラストの「悲しみ」が90.5%であった。

2. 「喜びと悲しみの感情理解に関する課題（自己と他者）」の正答率については、精神発達遅滞群は表3に、自閉性障害群は表4に示した。

また、感情理解に関する課題（自己と他者の結果）について、喜び・悲しみの理由それぞれの詳細も含めて18人中の精神発達遅滞群の一部を表5に、自閉性障害群の一部を表6に示した。

表1. 「表情認知課題」の正答率（精神発達遅滞群）

被験者数	写 真		イラスト	
	喜	悲	喜	悲
18人	100%	100%	100%	100%

表2. 「表情認知課題」の正答率（自閉性障害群）

被験者数	写 真		イラスト	
	喜	悲	喜	悲
21人	90.5%	81.0%	90.5%	90.5%

表3. 「喜びと悲しみの感情理解に関する課題（自己と他者）」の正答率（精神発達遅滞群）

被験者数	他 者		自 己	
	喜	悲	喜	悲
18人	94.4%	88.9%	88.9%	77.8%

表4. 「喜びと悲しみの感情理解に関する課題（自己と他者）」の正答率（自閉性障害群）

被験者数	他 者		自 己	
	喜	悲	喜	悲
21人	85.7%	52.4%	71.4%	57.1%

表5. 「喜びと悲しみの感情理解に関する課題（自己と他者）」の結果の一部（精神遅滞群）

	性別	CA	MA	他 者		自 己	
				喜	悲	喜	悲
a	女	12:1	6:8	○笑う	○だって泣いてるから	○だってうれしい	×（笑う顔）お母さんが小鳥を飼えないって言ったから。
b	男	15:4	5:11	×（泣いてる）泣く	×（笑ってる顔）死んじゃったから	○（笑う）サンタからプレゼントくる	○（泣く）死んじゃったから
e	女	13:1	7:0	○うれしいから	○死んだから	○うれしいから	○理由に詰まる
f	男	13:1	6:2	○（笑ってる）わかんない	○（泣いてる）わかんない	×（怒る顔）わからん	×（怒ってる顔）わかんない
g	男	14:11	6:8	○うれしいから	○死んだから、悲しいから	○うれしいから	×死んだから
h	女	13:0	5:3	○誕生日だから	○死んでるから	○うれしいから	○（泣いてる）わかんない
i	男	13:1	5:4	○ありがとうって言ってる	×（笑ってる）かわいそう	×悲しい、涙が出る。	○涙が出る
m	女	16:11	6:6	○ケーキとかプレゼントをもらったからうれしい。	○死んだから	○2つもらってうれしいから。	×死んだら喜ぶ顔。ほえると怖い。
r	男	13:7	6:4	○（笑ってる顔）無回答	○死んだから	○もらってうれしいから	○悲しいから

※ 生活年齢は1998年12月中旬現在で算出。精神年齢は、V養護学校、W養護学校で算出したものである。

※（ ）は、間違った選択、不明瞭な答えを述べた者が、選んだ表情図について表現した言葉。

※ 網掛けの事例は、結果考察であげている事例を示している。（表6も以下同じ）

表6. 「喜びと悲しみの感情理解に関する課題（自己と他者）」の結果の一部（自閉性障害群）

	性別	CA	MA	他 者		自 己	
				喜	悲	喜	悲
A	男	13:7	6:0	○無回答	×（笑う）	○無回答	×無回答
B	男	6:2	3:6	○無回答	×（笑った顔）	○無回答	×無回答
C	男	25:0		○無回答	×無回答	×無回答	×無回答
G	男	11:7	5:0	×無回答	×無回答	×無回答	×無回答
H	男	10:10	5:3	○いちごが一個	○死んじゃったから	○笑ってる顔だから	○小鳥さんが死んだから
I	男	15:4	7:3	×（怒ってる顔）プレゼントを2つもらったから	○なくなったから	×ぐしゃぐしゃって顔してるから	○悲しかったから
L	男	13:7	6:0	○無回答	×（にこっと笑う）優しい顔	○どうしてこの顔する	○泣き真似をする
M	男	15:9	7:3	○無回答	○泣いちゃった	○ケーキをもらったら優しい。あける。	×（怒った身体表現）分からない
N	男	18:2	6:4	○（笑ってる顔）えへって言う。	×（笑ってる）小鳥さんを取る	×（言わない顔：怒り）言わない顔	○悲しんでいる
R	男	25:7		×無回答	○無回答	○無回答	○無回答
S	男	26:7	5:0	○無回答	×（これ）無回答	○無回答	×無回答

3. 感情理解

① 精神発達遅滞群（表5）

精神発達遅滞群では、「表情認知課題」に100%正答しているにもかかわらず、「喜びと悲しみの感情理解に関する課題（自己と他者）」に誤答している者が見出された。これは、「表情認知課題」と「喜びと悲しみの感情理解に関する課題（自己と他者）」の課題の分かりやすさや、検査者の教示や課題自体の被験者の理解の度合いも結果に影響を与えているように思われた。他者の感情は共感できても、自己に置き換えた場合につまずきが見られることも誤答の要因の1つとして考えられる。

1) 「喜びの感情理解に関する課題（自己と他者）」

この課題の（他者）で誤答したのは、事例bで、（自己）で誤答したのは、事例f、iであった。

事例bは、「喜びの感情理解に関する課題（他者）」で誤答し、回答した理由では、「泣く」と答え、悲しみの感情を選択している。（自己）では正答していた。

「喜びの感情理解に関する課題」において、他

者の感情を推測することは困難であったが、自分の立場に置き換えて考えると正答できている。「喜びの感情理解に関する課題（自己と他者）」の教示の意味が、聞くだけでは理解しにくかったことも誤答した理由として考えられる。

事例fは、「喜びの感情理解に関する課題（自己）」で誤答している。（自己と他者）両方の回答理由において、「わかんない」と答えているが、（他者）では「喜び」の感情を選択できている。（自己）では、「悲しみ」の感情を選び、誤答していることから、事例fは、他者の感情理解はできても、それを自分に置き換えて考えることが、まだ難しかったと思われる。

事例iも事例fと同じく、（他者）では「喜び」の感情を選択できているが、（自己）では、「悲しみ」の感情を選び、誤答しており、選択理由では、自己に置き換えた場合、「悲しい、涙が出る」と答えていた。事例i、f共に、自己へ置き換えて感情を推測することの困難さがみられたが、問題提示が他者から自己へ変わることへの理解自体が、難しかった可能性も考えられる。

2) 「悲しみの感情理解に関する課題 (自己と他者)」  
この課題の(他者)で誤答したのは、事例b, iで、(自己)で誤答したのは、事例a, f, mであった。

「悲しみの感情理解に関する課題 (他者)」で誤答した事例b, iは、選択理由において「死んじゃったから」「かわいそう」と主人公(他者)の感情を共感している言葉が聞かれるが、感情は、「喜び」を選択していた。ストーリーを聞いて、他者の「悲しみ」の感情を感じているが、その上で、空白になっている顔に入る感情を選択することが、難しかったことも考えられる。複数の作業を、検査者の言葉を聞いてこなすことにおける困難さも見受けられた。

「悲しみの感情理解に関する課題 (自己)」で誤答した事例は、事例a, f, g, mであった。選択理由をみると、「わかんない」と言って誤答した子どもが一人(事例f)、「お母さんが小鳥を飼えないって言ったから」「死んだら喜ぶ顔。ほえると怖い」と言って、「喜び」の感情を選択した子どもが二人(事例a, m)いた。一人(事例g)は、「死んだから」と答えられているが、正しい感情を選択できなかった。

事例fは、(他者)では「悲しみ」を選択できたが、(自己)では分からなくなっており、自己への置き換えの段階で困難さがあったと思われる。事例gは、共感できているが、(自己)の表情選択で誤答しており、問われている意味が分かりにくかったと思われる。事例a, mは、(自己)の感情で「喜び」を選択した理由を自分なりに述べており、結果は誤答だったが、自己に置き換えて、共感し、考えることができていると思われる。

## ② 自閉性障害群 (表6)

自閉性障害群では、「表情認知課題」に誤答していたにもかかわらず、「喜びと悲しみの感情理解に関する課題 (自己と他者)」において、正答している事例が明らかになった(事例A, R, S)。

これは、写真や絵によって「悲しみ」の感情を理解することは困難であっても、ストーリーを聞いて、見て、主人公(他者)や自分の感情を理解

する共感性が、確かに育まれているという結果であると考えられ、具体的にみていくと、以下のようなことが考察される。

### 1) 「喜びの感情理解に関する課題 (自己と他者)」

事例Aは、「喜び」の「表情認知課題」で、写真、イラスト共に誤答しているが、「喜びの感情理解に関する課題 (自己と他者)」では、選択理由は無回答だが、(他者と自己)共に正答している。写真やイラストによる感情認知よりも、ストーリーを通して感情を理解する課題の方が、事例Aにとっては他者や、自己の感情を理解しやすかったものと思われる。

事例Rは、「表情認知課題」の「喜び」の写真課題には正答し、「喜び」のイラスト課題では誤答している。事例Rにとって、イラストよりも、写真による提示の方が感情を認知しやすかったと思われる。

また、事例Rは、「喜びの感情理解に関する課題 (自己と他者)」においては、回答理由は無回答であり、他者では誤答したが、「喜びの感情理解に関する課題 (自己)」では、正答していた。主人公(他者)の感情を推測することは難しかったが、自己に置き換えて、「喜び」の感情を選択できており、自分のこととして考えた方が、理解しやすかったと思われる。

事例Sは、「喜び」の「表情認知課題」において、写真では誤答しているが、イラストでは正答しており、「喜びの感情理解に関する課題 (自己と他者)」では全問正解している。事例Aと同様、回答理由では無回答だった。事例Aは、写真やイラストによるものよりも、ストーリーのある提示の方が、感情理解がしやすいと思われ、事例Sは、写真等、人間の表情から感情を認知することは困難であるが、イラストから表情を読み取り、ストーリーを伴った物語から、他者と自己の感情を理解し、推し量ることができていた。

事例Rは、イラストという象徴(記号)よりも、実態に近い写真の方が、感情認知をしやすと思われる。ストーリーのある紙芝居を見て、自己に

置き換えた場合、「喜び」の感情を選ぶことができていた。

事例A, R, Sが、「表情認知課題」で誤答が見られても、「喜びの感情理解に関する課題（自己と他者）」で正答できている結果から、自閉性障害児に、状況や、感情が伝わるように語りかけ、絵や言葉を通して文脈や、登場人物の気持ちを感じ取ってもらえるよう、関わり続けることが、感情理解にとって意味のあることであることが、考察される。

## 2) 「悲しみの感情理解に関する課題（自己と他者）」

「表情認知課題」に誤答したが、「悲しみの感情理解に関する課題（自己と他者）」に正答した事例は一人のみであった（事例R）。

事例Rは、「悲しみ」の「表情認知課題」で、写真とイラスト共に誤答しているが、「悲しみの感情理解に関する課題（自己と他者）」の課題では正答していた。写真やイラストという、単発の刺激の中で、写真の表情や、絵の部分の違いから「悲しみ」の感情を読みとることは、分かりにくかったと思われる。しかし、事例Rにとって、ストーリーが展開し、より多くの絵や言葉による情報が伝えられる中で、感情を選択する紙芝居の課題は、注意を向けることができ、主人公（他者）の気持ちを考えやすかったと思われた。「表情認知課題」では、「悲しみ」を誤答し、感情認知ができていないという結果に受け取られたが、ストーリーを通した「悲しみの感情理解に関する課題（自己と他者）」では、主人公（他者）の「悲しみ」の感情に共感できており、自己に置き換えた場合もまた、「悲しみ」を選択できていることは、自閉性障害児も、感情理解が発達することを示唆していると考えられる。

Hobson(1989)は、他人の情動を知覚する能力が、自閉性障害児には欠けていると述べているが、本論文では、自閉性障害児も、文脈を理解し、うれしいという気持ちになっている。着実に感情理解が発達することが見出された。自閉性障害児に対し、日ごろから感情を育む言葉かけや、絵本等を

通して文脈や主人公の気持ちを感じてもらふことは、感情理解を育む上で大切なかわりであると思われた。

本論文では、実験の結果だけではなく、子どもたちが回答理由として答えた内容を詳しく見ていたのだが、その中で、子ども一人一人の答えの中に、感情理解の発達の可能性があることが感じられた。

一人一人にとって、理解しやすい方法があり、表情認知の刺激が写真や絵による提示よりも、文字によるもの、映像や音声も入ったものの方が理解しやすかった被験者もいたと思われる。「喜びと悲しみの感情理解に関する課題（自己と他者）」では、悲しみの課題の方が、難しかったように感じられたが、表情カードを適切に選び、また、選んだ理由の中で、十分理解し、共感できている子どもも多くみられた。時間は要しても、潜在的可能性の芽吹きが感じられる結果であり、どこにたまたましているのか、どのような関わりを今積み重ねていくことが豊かに感情を育むことにつながるか、その子に応じた関わりをいつも心がけ、その子なりのペースで進んでいく感情理解の道のりを、信じて向き合っていければよいと思われた。

DSM-V(2013)によると自閉性障害は、「自閉症スペクトラム障害」に位置づけられることになっている。自閉症スペクトラム障害児は他者の感情を配慮したり、喜びなどの感情を他者と共有することが困難とされてきた。そのため彼らの感情認知について多くの研究がなされている。従来の研究からは、ある程度の年齢に達した自閉症スペクトラム障害児では、基本的感情とよばれるものについては他者の表情、及び感情を喚起する状況の個々の認知には問題がないことが示されている。しかし、臨床的記述や彼ら自身の言語化される内的体験から感情認知を見ていくと、例えばBowler(1992)が、知能に遅れがなく、「心の理論」の課題を通過できるアスペルガー青年の体験記述の中から「感情語が出て来ないこと」や「基本的感情

語の使い方の奇妙さ・不適切さ」を指摘しているように、言語機能が良好とされる自閉症スペクトラム障害児においても、基本的感情の認知や感情語の使用に困難さを持つことが示されている。このようにこれまでの実験的研究が示してきたものとその臨床像には大きなズレが存在しているようである。その背景には従来の研究の多くは、対照群との比較において、劣るかどうかという能力的側面が優先され、彼らがどのように感情というものを認知しているかという質的な認知スタイルの検討が補則的にしかなされなかったことがあげられる。加えて感情認知についてその発達のプロセスを考慮せず、単一側面のみを能力比較しているだけでは、彼らの感情認知が劣るものであるのか、対照群とは異なるものであるのかを検討することはできないだろう（宮本 2000）といわれている。

## VI. おわりに

研究の現状ということになると、自己と他者の理解という観点から直接、自閉症スペクトラム障害の発症メカニズムやその発達的特異性を明らかにしようとすることは相対的に希少であるといわざるを得ない。これまでの研究においてある意味では等閑視されてきた、おそらくは本質的に不可分であり、強い発達的な関連性を持つであろう自己、他者、そして心という、総合的な発達モデルに依拠した研究がなされる必要があると思われる。自閉症スペクトラム障害は、その病理性を始めとして、未だ明らかになっていない問題が多く挙げられていると菊池（2004）は述べている。今後も、精神発達遅滞や、自閉性障害の子どもたちにとって、支援につながるよう研究を深めたいと考える。

子どもたちの感情を育む、日々の、あたたかく丁寧な関わりを通して、これからも多くの精神発達遅滞や、自閉性障害の子どもたちの心が伸びやかに育ち、傷つけられ、抑え込まれることなく守られるよう祈りたい。

謝辞：多くのご助言と、ご指導をいただいた久留一郎先生、餅原尚子先生、共同研究者である谷口智英先生に、心からの謝意を表したい。

## 引用文献・参考文献

- 1) Borke, H. 1971: Interpersonal perception of young children. *Developmental Psychology*, 5(2):263-269
- 2) Burns, N. & Cavey, L. 1957: Age differences in empathic abilities among children. *Canad. J. Psychology*, 11(4):227-230
- 3) Bowler, D. M. 1992: "Theory of mind" in Asperger's syndrome. *Journal of Psychology and Psychiatry* 33, 877-893.
- 4) Chandler, M. & Greenspan, S. 1972: Ersatz egocentrism: a reply to H. Borke. *Developmental Psychology*, 7(29):104-106
- 5) Haviland, J., & Lelwicka, M. 1987 The induced affect response: 10-week old infants' responses to three emotional expressions. *Developmental Psychology*, 23:97-104
- 6) 廣田 明子ら 1994 自閉症児の「心の理論」に関する予備的研究—自己および他者の感情予測— 上智大学心理学年報 18; 45~59
- 7) 久留 一郎, 餅原 尚子 1990 自閉性障害に関する心理学的研究 (IV) Check Listによる診断項目の作成: 第二報 鹿兒島県医師会報
- 8) R.P. Hobson, J. Ouston and A. Lee (1989): Naming emotion in faces and voices: Abilities and Disabilities in autism and mental retardation *British Journal of Developmental Psychology*, 7, 237-250
- 9) 星野 喜久三 1969 表情の感情的意味理解に関する発達的研究 *教育心理学研究* 17:90-101
- 10) 今井 靖親・桶本 真也 1973 幼児の共感性に関する実験的研究 *奈良教育大学紀要* 22(1):185-193.
- 11) 石井 哲夫編 2003 自閉症ガイドブック シリーズ2 学齢期編 社団法人 日本自閉症協会
- 12) 菊池 哲平 2004 自閉症における自己と他者、そして心—関係性、自他の理解、および情動理解の関連性を探る— *九州大学心理学研究*, 5:39-52
- 13) 宮本 淳 2000 高機能広汎性発達障害の感情認知 (I) - 他者感情推測における手がかり情報を統合することの困難さ - *発達障害研究* 22(1):34-44
- 14) 櫻庭 京子・今泉 敏 2001 2~4歳児における情動語の理解力と表情認知能力の発達の比較 *教育心理学研究* 12:36-45
- 15) Sorce, J.F., Ende, R.N., Campos, J., & Klinnert, M. D. 1985 Maternal emotional signaling: Its effect on the visual cliff behavior of 1-years-olds. *Developmental Psychology*, 21; 195-200
- 16) 高木 真由美・高橋 道子・望月 登志子 2007 幼児期の他者の感情理解の発達—文脈に沿った感情変化を通して— *東京学芸大学紀要 総合教育科学系* 58:135-145
- 17) 若松 昭彦 1989 年長自閉症児の表情認知・表出に関する実験的研究 *特殊教育研究* 27(3):19-30
- 18) 若松 昭彦 2002 自閉性障害者の表情認知に関する基礎的研究 II 広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部第51号; 91-96
- 19) 吉井 秀樹・吉松 靖文 2003 年長児平成障害児の自己理解、他者理解、感情理解の関連性に関する研究 *特殊教育研究* 41(2):217-226



---

A clinical-psychology study concerning understanding of the minds of self and others: recognition of pleasure and sadness in children with mental developmental retardation or autistic disorder

ODA Naomi

This study tested a Facial expression recognition task and a task in which subjects were required to understand emotions of pleasure and sadness (in others and oneself). Sample groups: one group of children with mental development retardation and a group of children with autistic disorder. These experiments showed that in particular the children with autistic disorder tend to respond correctly to the task related to understanding the emotions of pleasure and sadness (in others and oneself). This is despite responding incorrectly to the facial expression recognition task. It is therefore assumed that children with autistic disorder can understand the emotions of both others and themselves through empathy with the story being told. This response does not occur where there are only photos or illustrations with no story. It is considered that for patients who have these disorders, empathizing with the emotions shown in stories could help to accelerate their development of, and ability to understand, emotions.

**KeyWords** : Mental developmental retardation, Autistic Disorder, understanding of the minds of self and others: recognition of pleasure and sadness